研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	感情表現における言語と身体の関係とその教育的含意 SPAC 俳優による参加型共同実践のワークショップをとおして				
研究組織	代　表　者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田　透
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田　透

講演題目

SPAC 俳優との多言語・創作ワークショップ――言葉、身体、感情

研究の目的、成果及び今後の展望

研究の目的：母国語での感情表現のあり方を問い直し、外国語を運用するさいに応用可能な言葉と身体の関係を作り上げること、それから、コロナ禍における身体的な拘束感と心理的な圧迫感にたいして言語教育の側から応答し、市民教育につなげていくことが、本研究の目的であり、そのために、県立公設劇団である SPAC の俳優と協働しながら、自分自身との対話を深めるだけではなく、他者の心身にたいする理解や共感をも深めるような、創作寄りのワークショップを開発・開催することを目指した。

研究の成果：SPAC 俳優の関根淳子氏を講師として招聘し、10 月にオンライン 2 回、それから、ムセイオン静岡学内実行委員会の後援を得て、12 月に対面 2 回、計 4 回のワークショップを実施することができた。参加人数は延べ 30 名、オンライン回がそれぞれ 9 名と 8 名、対面 1 回目が 4 名、2 回目が 9 名であった。

オンラインの「英語と日本語で音読するシェイクスピアの『ハムレット』」ワークショップの 2 時間は、言葉の音声的側面を集中的に取り上げ、前半は英語、後半は日本語で、戯曲抜粋を輪読形式で音読した。4 時間の対面ワークショップ「初めての演劇ワークショップ――言葉や身体との出会い」がフォーカスしたのは、身体と感情表現の関係である。1 回目の「集団で作る音楽劇」の参加者たちは、既存の戯曲の一部を楽器演奏を交えながら共同上演し、現実では遭遇しそうにない状況に身を置き、実生活では口にしそうにない言葉で対話するという非日常を体験した。2 回目の「個人で作る創作劇」では、ゲスト講師として招聘したギタリストの原大介氏の即興演奏とコラボレーションしながら、参加者ひとりひとりが自らの生活体験や日常感覚を基点としたパフォーマンスを創作し、それを自ら上演したり、他の参加者の協力を仰ぎつつ演出したりすることで、自己の感情を意識的に追体験しつつ、自身の感覚を他者と分かち合った。

アンケート調査によれば、参加者の反応はすべての回できわめて肯定的で、ほぼ全員が「とても満足している」または「まあまあ満足している」と答え、今後類似のイベントがあればまた参加してみたいと回答した。対面ワークショップについては、回答者（回答数 9）の過半数以上が、ワークショップをつうじて、言語、身体、感情にたいする意識に変化があったと感じていた。

今後の展望：「気軽に参加できて、真剣に学べて、他の人と真剣に語り合える場があるのは、とてもありがたい」というコメントをオンラインのワークショップ参加者からいただいた。役に立つものから程遠い教養的なもの、即効的とは言い難い創作的なものを切望としている人々は、確かにいる。そのような潜在層に訴えかけ、大学の学びを広く社会に開いていくために何ができるか。今後それをさらに考えていきたい。